



皇
911.107
Ka W
0

62266

和哥懷紙短冊認換同會序次第口傳注之
付題之心得訂之用捨ホ
一二月一首之懷紙書換事

元月陪 和哥所同詠

寄道祝和款

采雅

ふも心ふ家よハ乃去
り氣ゆきききえて日
みち兄接るを歌多来
にり



右件書換法門外之外無之併お
の書不終者如形又の去る
元月同詠寄道祝

和哥

権中納言定家



右の如新之三行三字一書
紙本不田舎に隆清座にお旅志文
和文所と有難い

一奉納和哥百首之懷紙書換事

911.107
W

春日侍

任者實前

詠百首和歌

定家

志賀花園

あ、浪や志の花そのくすむ目れ

あ、奴白ひまう〜風そあく

右二行は二書之さく一書之たくに意類
あともうと年号日付二ありと從之類也
あくても何々〜

一同奉納徳換り

夏目延

八幡社壇

詠二首係哥

○ 從二位雅俊

之扇

さよあけく福やよさひふ

はありはあ〜ぬ何ふきの

かせそす〜き

右一書あり三行三字二書より十書までを
如新二行七字十書まで二行七字に必
書しと侍りき

一天神人丸法示く懐紙之様事

秋日陪

一屋廟新前同

詠五言和哥

夕鴈

定家

右方ハ三行七字他屋廟社壇も五八人

秋日侍

人丸新前

詠三言和哥

定家

神祇

右方五二行

七字と多一人

一和哥 百言之短と了時一卷端作去様

詠百首和哥

藤原朝臣雅親

田家

小山田や初々さぬ石残庭に

水は~~~~せくすやるりる

一七夕和哥懐紙之事

七夕同詠憶牛女

言志和哥

従二位雅俊

右方秋乃法也中ちきり

志をすくくと布衣
那みたしる阿戸の
川之勢

右一巻の時如冊七巻たるを紙二枚
片きやちしに三巻にたくはる二行七字
たるへし

一巻月和奇懐紙了

八月十五夜同詠

月契子秋

和歌

権中納言定家

右一巻なる三行三字二巻より外を二行
七字とすべし但一巻に二行の
同名月懐紙了

九月十三夜同詠

月出山和奇

定家

右書換るる初之口傳にあり
一貴人之會席にあり懐紙端作る
秋日同詠三巻和奇

定家

秋声正枕

右字の冬二行七字但出家ハ季踐不
出作

一等輩之冬序之出換る
詠三首傳哥

權中納言定家

落花入集

右字の冬二行七字季踐不出以同とい字
もたのく列は讀と出心よて出と如
け出の時を不出と季踐出とい句端の
但冬序ありて季納言會木の冬紀
一人をり後以懐紙よつ同と出字ふ
出

一冬序忘るくも時自終一國よ二冬三
そく時あ出事

冬と目同詠湖上氷和哥

定家

右字のハ二行七字但一冬ありハ三行三字
一二冬懐紙別而一與出換事

詠草花也歌和哥

定家雅

右字のハ二行七字
一二冬の時大し二冬ふ出しる

詠庭上春云傳哥

学女推

風越多々撫さる

舞多免乃座少

去王只為子世民古

毛敷只より好

詠水石磨少 年和号

正三位雅俊

若常々俱多少 少

志雅以心より少

傳色也免少子世や完

若伴毛人津

右奇き何と三好少字也作家之在事人
あして何松屋より少

一五少之懐氏ハ二牧續の少とより少

春日同詠五号和号

親定

羽川

羽川屋よりや其れ

越は華園入てれ少

雪の下あり

玉鴉

たゞし 清や川流乃あまの
まのいゝてかすこみうら川
その月うけ

春日日詠

そり響やあまそ此屋らひ乃
花の香とあやうーたろろハ

懐紙 續因ナリ
神やあやうむ

三湯山

花の色よりあはれなりあま
かきーあこころあつうは

一 五々あまのま

葛城山

一 浅えとりあうりうら

一 春柳のうけうら山乃

一 ちりさちあま

一 七々分七夕乃と紀あはれ

秋日同詠七々信書

定家

初瀬山

伯耆あはれなるをあま乃

山あまも秋うらたを

志川のほとり

立田山

心あくるにむすひのいろそ
また居るささしと襟
あくる下を流

奥平浦

旅衣まきしひくあり
夕暮かきあかり明や
そ戸はく風

文殊寺

秋もあひく身とありぬ

あくる霧乃あにりきされり
高城はく

水鏡

あくる乃置けくす波
あまはくもむ早はくへと
秋くせそふく

小倉山

とらう山あうはくきや
のあうましと鹿乃真の
つれあうすわ

宗治川

川あることさう川をいふは
をさうらるるをさうらるる人

新のうららに

右の影と懐紙つさちと
紙を二枚綴へ

一十号懐紙を綴る

冬の日同詠十号和歌

家隆

清瀧川

清瀧の流るるは
あぐれをそむくよは

上クマコ
あぐれをそむく

小塔山

秋を月をさしは
梓弓をわらふ山
はなてそ 燕

住吉浦

住吉の浦に
うら風りたる
みづは管屋

田舎路

懐紙つさち
おむたえの

そむ民乃名こいゝくれぬ
神やさゆらん

葛乳山

あゝ地山ちりうひまを記
花とみく雪あおひくく
道やほしむ

深沼原

是くく此園詠を道ゆく
父日記是をれあらし記
うさゆりま

安達原

我士乃あさちれまゆあ
あさゆゆこあてもをま
あをまゆしあ

岡幡山

秋乃田のいな紫のみ子
吹つ勢は身まむ勢又
あゝのくれま

初之浦

こく乃うく此神あうさあ
まし初あをまあひく
あゆもくれ

懐緬つらち

桐坂園

あゝさゝけ園のいなり虫

琴うた多そふりきもあは

はつうせそふく

右のち紙と三枚續くくりに居る

けかたろべー併二枚ああるもへ

一十五そかろる

春日同詠十五首和歌

うらひを

讀人志願
名を七書

うらひを乃あらくにそちあつ

うらひをとのこちあくは

かゝるに

くへさかとおしすふぬきや清き

はくあゝ急の人をそむ

うつをえ

流乃うつをえれはむそれ

ひろの神りもあゝむ

あ

袂らりもあれく玉珠つ

あれあもそれうつをえむ

懐

つらちナリ

あゝうちあるもくもみそむ

あひしうまゝかゝあひ川、
かゝあひさささ

か川ささも波あつあつさされて
を吹あつあつささつむさ海
もも、あひ

しあひを海あけささささ
あひあつあつあひあつあり

あふささあひあつあつあつあつ
ささあつあつあつあつあつあつ

あふささあひあつあつあつあつ
あふささあひあつあつあつあつ

あふささあひあつあつあつあつ
あふささあひあつあつあつあつ

あふささあひあつあつあつあつ
あふささあひあつあつあつあつ

あふささあひあつあつあつあつ
あふささあひあつあつあつあつ

たしひきくすもほろめてぬら

さうり日

我ハけさうひあそつとむのふを
あさあつと直しりり

とみるへ

あさあつと玉にぬくちやさうあ
たると此あまも縁をこあし

右三枚を續て兼しあとなつてつらあハ
セ書へ一又十五字まで三行七字あまも書り

一日懐紙三行三字一カ葉書

秋日詠草花書紙和歌

栄雅

志願書乃紙書 言葉

多敷く書けり地尔

千種の書もあがさく

夢作又

右懐紙何となく何よりシカたさへ

三行しあま一行為木と奥を何より

一とむり乃懐紙書格とる

花乃あはうはり

りなまりはひさ

はくしあまあせり

ありはらわぬ勢

いほり

あきれたる名はこ

ありはらわぬ勢

あきれたる名はこ

あきれたる名はこ

右一と二と三と名はつたへ一は借在

之は名女の懐はあうを取一

一をいふ人向ふ一ういふ女初書と表

はつと福いそ乃書一と書一と名

といふ人書一と書一又書十と書一に成

いづれもやいと續てて一書一その時

多し妻乃とさぬはと書一と書一又その女を中將

か初が細そあきと書一と書一と書一と書一不

給者必字名あり一と書一と書一と書一と書一

又後成口女乃と書一と書一と書一と書一

いやいよハ書一と書一と書一と書一と書一

一と書一あり毎るけと書一と書一と書一と書一

一と書一なるは經天と書一と書一と書一と書一

新歌名歌あしてと書一と書一と書一と書一

書石意 いっ意ハ経天にそぬ沖の石は
人そそと書一と書一と書一と書一

又歌 いっ意ハ経天にそぬ沖の石は
人そそと書一と書一と書一と書一

いてそと人子あやう

右如新あましく何と名をさるあまをさしてこそ
林の中はまのこにハ講師をハあまうあり
こもせし望しへいハ籠も女房あまの懐
紙短天和母くとして昔名かこくハ能
女ましく他名その名残あまをさハ漢羅
一短冊あましくあまうあまうこ

おとこ くれをてハ 侍と成

まき 加こえたり 志れり

屋く 屋さむ 解れ

又別ニ教ハあまう

はくく まてー あらぬ あけ

ことさて ちさり ちさち 是

ーも ーり ささめ ハ

又別ニ地ハあまのり

何す乃く教もあまの秋の

あまの月あまのり

名やわりくれ世

一短冊あましくあまのり

侍習乃海に物すハ 何初まつ

あまのりあまのり

まきわ

大小短冊長さ九寸余唐さ口傳る世す
四五かゝるへし短冊の教し書ハ何と見
女まうのゝにありへらひさてハたし仁
ちくかゝり難きし結者女乃短冊
のこの短冊のくもたかくてし下の句歌を
一字ささきししてさし
一懐紙三さし出歌る

初序 秋夕月 結意

右中を一字何きし又

月出山 見意 松風

又此短冊とありしにて出人併初し出歌一結

一五さ出歌し極く有

事月

五さ歌

初ま雲 野草葉

梅葉風 名所里

寄神祝

右五さハ一紙加くのまゝ一季ハ二さ三さハ

短冊ハ加く厚く

是十五さ如ある歌く

一兼歌短冊ハ五さ極一さ歌く事

寄道祝 事十

右かくのまゝ短冊ハ一さハ中不ことり出

吾程人知くを中折るあう紙を扱ふたふ
程の字かうらと程人しうへの程とハニ寸五多程あけて之
て一巻に傳ふる

一三学歌同程人由之程る事

初秋

田月

同秋

十十。

新風

七夕

忠志

右程人由二中折りて紙を二中折く包て上中
折何りかく居く又紙を三分ほど廣さを
きてを運送るりゆく包かこせせ此よく入て
て紙の折りの折一折何りき送く、まいと
二中人は傳ふる

一浪名歌出歌事

かき

あうた

むし

三月日

さう

を味

あへん

右如形出歌た一は是ハさ此文字は多か
あうへ加へて人伝ふる

一名西に歌出しむ時ハ季意雜く名指ハ
う付て一出人たやへハ

吉坂山

赤出渡

十十

右如形はう日余以て一別以

一云候はさう由ハ紙を二中折りて歌をせ付

如形はたさへ

去今月

竹亭月

右十身十日清き月以て歌哥二五折る中い也

九月二日

定家奉

奥中々底宛西一ツ也い也

一 倭名句歌懐紙未後之事

春日同詠 二卷 和歌

紀書之

むきさきとも

雲たらし本此やもそ歌乃

由さねさかひあまきさ空ら

花をちりふ歌

山より月也

去のぬき山と雲らさ空さハ

河より川乃やささ月日の

いとさきく歌

一七夕之懐紙しるす 瑞作る七夕と云

い〜歌ハかあ〜す〜七夕の心あ〜てて

あ〜ん〜又七夕〜時イ季に雑と三出ノ意といく〜七夕よ

う〜た〜いあ〜ん〜又〜七夕な〜七夕

い〜歌者〜又ハ初〜七夕よ〜

自余ハ〜歌者〜七夕七夕此う

多〜

萩花小花首を撫子花女房を又る〜
新編の毛

一 年 既 今 始 入 歌 入 事 必 季 此 歌 多 収
も 祝 之 乃 雜 の 題 多 下 但 一 等 題 時
又 ハ 其 季 子 入 歌 多 収

一 百 三 十 和 守 題 少 下 以 次 考 此 事 也
季 子 入 卷 双 抄 不 及 以 貴 覧 事 梅 之 友
秋 之 意 雜 入 始 末 乃 此 歌 別 而 考 貴
覧 乃 一 冊 讀 以 活 去 以 七 十 之 活 之 事
に 雲 霧 々 々 考 之 事

一 和 守 之 云 序 之 海 題 之 入 屋 之 此 之 水 上
花 湖 上 月 橋 上 之 紫 以下 乃 上 文 字 之
不 考 之 事 一 讀 之 但 屋 上 危 上 之 歌 也

不 考 之 事 不 一 讀 以 只 行 之 事 也 一 考 之 事
と 一 讀 之 梅 の 香 神 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事
梅 之 神 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事
の 上 之 香 の 香 の 香 の 灯 之 一 讀 之 事 一 月
待 意 之 月 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事
月 之 意 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事
又 青 黄 赤 白 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事
白 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事 一 考 之 事
心 之 後 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事 一 考 之 事
一 考 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事 一 考 之 事
日 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 考 之 事 一 讀 之 事 一 考 之 事

身、くうへとゆひそちいさく切あつと能
その人乃名又い幾日と可あつ相ハ短冊
と柳、管よときて二物又又讀と
よつて以海名柳、管よと書居くす以我
身、残昇下の四とて

一、懐あめ我性と実名ととと性との
是、くすくこのあつ、管あつハあく書居
也又期、居、少、と、讀、る、甚、以、不、口、不、
志、何、く、く、す、以、

一、是、乃、懐、あ、瑞、れ、廣、さ、ハ、年、れ、一、本、志、ふ
世、程、よ、二、三、三、三、三、外、あ、一、本、と、多、へ、

一、瑞、谷、の、音、乃、海、残、あ、短、冊、れ、上、よ、一、嘆、と
あ、る、乃、ハ、昇、下、れ、ん、と、わ、つ、と、と、あ、
一、本、あ、中、一、又、あ、式、の、由、名、に、書、短、と、て、以、十
二、三、三、三、短、乃、也、さ、こ、た、り、の、短、冊、り
ち、と、永、ト、從、と、さ、の、こ、不、洞、し、る、乃、以、併、
字、と、短、は、つ、を、一、短、何、と、短、あ、ま、と、有
へ、さ、る、

一、字、と、短、は、つ、を、一、短、何、と、短、あ、ま、と、有
り、海、ハ、晴、あ、く、乃、く、一、短、は、つ、な、り、中、短、れ
字、と、短、は、つ、を、一、短、何、と、短、あ、ま、と、有
お、不、由、ん、も、短、つ、き、何、と、短、あ、ま、と、有

ま—二出とあり

一由屋をたて語りゆく心は縁なきとあり
おかしき清きとす能く味すへき
おかしき

一兼器も由屋も初より縁なき後上院に
ときにおかしき
あまの由屋ハ折あまも二由の

定家上

寄道祝

吾乃と海わくは君成ちくあん
よひひいゆつ道徳吉の神

又如形もあは

千里上

ちすき

乃ちまねとされく生る苗あれを
あまの由屋ハ折あまも二由の
又あまやうれ

ふとくは

是川乃山へよされを志す雲は

いよせよとくもりし時あき

母舅之上

右あけあはき貴人の海上院の時あり

一冊各々これ海短冊一枚に字の二そ書積
めか類ハ何も懸かぬにてい

碇又られ 木七乃くと明四 梅又の花
ゆ六くみ 石又れこの 雪六れあへ 雲七れはくを介
赤六れ心 船又方四に 多又れく 又又これ

右めけのちや 字之千一能くくつり二書く
一多産續三一短冊裏書

年号何月日 住吉 当産
法宗 当産
右法宗し海をあげし 又を
年号何月日 当産

是ハ月次又各一讀し海めけのちし又ハ月
待多し此裏書

年号何月日 亦三夜 当産

下ハ法宗と云ふハとも亦三夜と云ふ
法宗此より終結
一懐書の裏書より書され懐紙此端作
し裏の通端より二三寸をとのけ
二書し但讀師題名傳師書紙録
み書しつ回又寸をとのをましくし
年号月日 住吉 法宗

又林の中一法宗のめハ

年号 何月日

會始

誦師 五月廿三

讀師 五月廿一

題者 五月廿二

右め付あり日付之下る會始ありと如くあり

又月次にて

月次會

年号 月日

又一卷の儀にて

年号 月日會

又八月訪しと云ふあり

年号 月日亦三本と云

是より法示しとより既經懷書短冊裏書ハ題者又ハ堪能くありの如く懷書も短冊も裏書年号し字じらうり懷書短冊し上の端との分際二三寸おきしてあり

一和字披講するに於て初をハ調子

有明なるに於て見えしにあり
何かつきをたりきものあり

不知振りに傳ふ

一古寄と云はるる上多れ振り懸念
新寄と云はるる能くもむよハ五雜

一初乃五文字ハ花の春月の秋中くも
と知るるりるるる御隆儀當時名ふ

一古栞の言ハ能く吹と云ふまゝハ大加ハ
元渡又やみも何もふ二詠之

一月次又名等儀の一巻あり懐あり
当座次中月よの字又名懐あり

一和寄合席一立振り先文基ハ上ハ
下と線上流にて中く不もハ

川合詠まゝハ折紙以下お直一垂之

一續寄短冊子詠こよ折て柳管
又祝の好まむいとし
の字ハ短冊と一よ字と三り

折り能く折ちを付く一由ハ内より
能くしるるるり折りなると

その手名家とも口傳り出せば
かよこよ垂く何も口傳りて祝乃蓋

も入て垂く上流ハ短冊乃蓋れ
持来りてさるる懐あり下

先文基ハ短冊ハ何れも先貴人
より一巻あり下指あり

より一巻の終る短冊を在る
凡先柳一巻の終るより始りて以
て左き二三片きより以て右に手残
片き大し手して短冊を在るして左
端乃大指より題をとりと阿きして
右に巻一頭終りて別々短冊
よ至るより右に手よ左より一以て
懐中にて貴人の書と後よあるす
よそ二三片返りめとこし二三も三も
一其後終りて披見して詠草の形
ありと題と一書写して清書に以て

短冊ハ何枚も一冊をとりて
持し如く前に志川よりおきて右の手
よ左についで右に手残つき柳一巻
よおき可く返りて終りて短冊を題
より海も又ハ清書して題に方を
したよ折て何れに後口傳多々
一懐紙と文書よある中懐書と左き
袖乃下よ、懐書乃かこのを指三巻とを指しを付く
右ノ手に持て文書にありて各場書とを
合よ、右ノ手に持て文書にありて各場書とを
時をわけてしよとてひらき一
己の巻巻しと終りて付したる

手よりこれたり先乃方と知て家
つこりハ清く海よりさよ以是あは前
しを持ててあし梅上流と一り
あし一しぬやりに一返つされハ懐紙
あす下指より先あ短冊ハ貴人より一
らる清くあ又下より一
一懐あし文書よりあし梅上流と手懐
し文書より上ハ不あしあし
さよよあより一それさあして文書
し下よあより一外より一に傳あり
一懐あより一至る一いつあし一読師あて

懐あし文書より一丸とちと未座
り一飛さより一さよ一懐あし一
らきよと記中程しあ方れ一と一
延し一さかより一さよ一と一川
延と一重傳先下指とあし一それより
次中ハ位とさよ一上流と一あさ
さよ懐あし團子下よ強あ乃方残上よ折
あされより一三寸程あかくあし一上残
ハそれ程短折より一又法中ハ懐あし
しつ一烈上て一さよ一又女席見なと乃
懐紙ハ程以上よさよ一但法中ハ女席俗

以下何も名々み下して裏表も各々よ
あつて併法中も女房も一人二人の
不及子細又披簿くはも女法中俗
以下みかく各々よさうして文基よ一
冊又短冊とさうして懐奥の中程の上
至して文基の等分よさうしてと
く法中一方よ可動くを附文基の上
ある懐奥短冊持やうに傍右の手よ
懐紙短冊と文基よ丸くたれ手
よてある文基をたれとさう
一不系し懐奥の下に二冊は但費人
二有用控

一後師の二冊二冊のめくさう一札を
あし右の方文基をたれとさう
誨師し実名とさう二冊は
法中よさう向文基をたれとさう
後師先短冊と一列は二冊は
家たれとさうこの五文基の
に至る懐奥の右の御に通し
懐奥の端し御の下にの
懐紙し端作し方中たれ
下にあり大ゆひ小指二を
取て文基よさうとさう

讀強いてそ乃うへよ又至て讀せしん家
讀をしてして文書乃上りて如以前し二
折して又此の通よまへのてくをて
短冊と重なりさうさ海よ文書よ至
て讀せし一さまをゆてて右乃
手指大指と中指とにて象るへ川
原し其次をさし其皆讀をて
しむまて可おしめ後をしてして短冊
と重なり懐安の上よ重なりあふく
至して二返し

一稱呼する必三声実名残并呼以併

二声やよあくの初法初よむの文
書をれ初よる座して後呼懐安を
至してこの後と神し懐安端作下
其難残出入て其の目たふしく花乃
本よ目残送といへるて残さるや戸と
いふと二讀ひ又ハハふと残さるも後
これを初おれる屋さしとあとか印して
讀し名をひし印るあしすし口傳也
あれも如今端作と後し実名残よ
うし其次よ器とさしして新残讀し
然ハも一傳り名をさるく讀せし

うり器残字ッ又字と字く一讀以懐
身し寄短冊もかう互以海ありる残
字より不可讀く只讀上て海を字
うししも不昔く是る海師の心
坊しし又短冊と讀く時器残先
うししと実名と讀梅字と一讀く又
披講し海海師あ少も不一海以て讀を
てしついで記述おす類しし海師
讀くし退おしつを記ししいふも声
よしにのりしと各退おあふしに傳
在うく不一階あし何も口傳除をあり好

又始も懐紙名次よりハ季歌ホる不
讀く作者し名と一寄しをうり一讀
依く同と云字は去し又同と去字
を讀人あましこひて一人をうりよつ
不一去し二人とも三人とも同と云字
可去しを海ハ月つある讀く去し
一書前座より海師し好左太たへ
併讀師よきむひ不二三名聲を講
し海しし

一及元声るし法おりもあふかあし
已之記後よて以伝貴人堪能し方七せし

一 家系を以て不傳以余人に傳するにま
をせて安んずる也後之に傳あり
一 字の披傳次を尋るに先に乙よかうしと
二重礼あり三重をまゝに此字二三と分
よして又乙にかうしめて二重しあり又を
乃一とまて三重に傳するに傳するに
徳るを字をまゝに押乙乙一とかうし
とて可なりされハ貴人し之をまゝに二重
一傳し必書航して又を貴人あるの
字を二重し始三重し神亦よあすを
を發声乃ハ好しと收又下の句斗

三重にかうするを併異儀とて以
次披傳付も此ハあそと細子大なるに
古来ありしありし
一 傳師ハ師作者ハ名を傳する者
役中一ハ名ありし先作志此稱号
と後とたとる權大納言雅俊と
ハむと能く折權大納言雅俊と後
俊とてハそれハ中納言とあてて三條
とのあそとわとのあそとの古くはあそと雅
ありとてハ下納言と申しよ子ハあそと俊
又稱号とて実名とて不傳して

只い友をくり讀する是又公家の中にも
おほくハ難あつてそれハ民アツてもくり
讀くもハお公家民アツて友を公家
あつて不補何それようそ無終に奈
官をくり讀てもそ人とそそ不終に
是又下籍の中にも難くお私を
座の貴人堪能又ハ和弁此師範也
御名をくり二讀一讀ハ書宛てて
又ハ稱名をくりまも讀くも何り是を
一讀ハ儀乞その人の方とらうと名也
やいよして讀くハ何れもハ羽又左京

大まな女よのあつて讀くと一讀ハ儀ハお高元志
女殿を讀くと不も余儀をそれと
まてハ有難く又ハ名を左京也を
讀くもそれを法めて重位も又法中
ハ名儀正遍眼として遍眼修正と讀
る一讀ハ儀ハ修正律師大法
上人以下同前也又ハ讀左書ハ
左原行平なると御名性実名以
下虫付ハ名文字も性も難讀
人あつて名も字も平と一讀ハ
讀又ハ名字并性も不虫とて一読

表の下と本よりそへて下以を換よも
上頁を下に下頁を上よるをて讀作
成し内より外をて又卷よる讀作
又初懐紙と文臺に至り成しおなくと書
く折あるを成し不許しと書しおやか
初よめし以成しあ家めけお形を下目
ハあ家たよ懐紙の奥よて以讀作し
方よ成し

一短冊字積のより下同名不定しそ成
題し初し字乃上一分程をて用し題
よ成しするよりあ不定しとて短冊の

指二をせ何より成てあ引と成そへ
結ひ以封表ハ五文よも人を何と文乃
成しと面より成てぬかこ文し方と裏
し不一成し懐紙も短冊も必云序
しあ序よも下へ成進ると下以成
成し役と

一花乃下取紫し類とく一序し懐紙短
冊を其本の枝よるを一結つとより
あしとん件結ひ成し乃と成し内より
花の枝と結ひ入し何と懐紙短冊
け以枝ハ下枝を成し口傳を之

一花乃下るるそよ不字懷安短冊は後上
ハむ時風なき吹散あるそよいつふむちん
と一季のいぬけし侍人同よまのぬきり
二斗り

一器と短冊よき時かきくんとある短冊
かきくやりに傳ふそよ友よ持く木のまへそ
かきく渡り

一書し懷安短冊よ凡とありて見し
る句傳ひあり能きとハ二有判按ひ必不也
と一あり

一そ歌懷安の時一字歌二字歌不也

三文字歌もいつありに傳あり

一短冊巻物にるり必亭と又志堪能し

方可讀り美と政ハ貴人し可讀よ

一我字と詠者も急詠朽本形展磔者

と一去の何も早下し詞と但人の字

と詠者もと去めては只詠者は字

し若あそよそよ人の字と朽本形展

磔ありハアはしく又詠者もハ法去

以下乃字とはふと

一後款と一懷紙よけりわて讀り多

産し字と後字と一ハされ短冊

し藁あふも續あしあつ別あ座
とあしまたあしりし
二續しりい懐紙しあまといひて与凡
いさふまむとて續し短冊しあし一續
とあし亦る懐紙あまも短冊とともあし
とてつくといひ依く短冊あ瑞あちと
畔てあし也

一三そお歌るり季子し意とも又季子し雜
ともあ家よは出て又そ十そも同りい
併り然季子意雜ともお歌吟あ家よハ
あふ季子意とのそ出又二そ歌のあ

あ内家古季子意又ハ季子雜た初但二そ
あふ季子意も可也

一歌し結歌とてそれハ山鼓夕燵田
家秋月あといへる結し歌とてし
山鼓とあし夕燵とあし名これ歌
いそれ残一ああつと結しと結飛歌
とて結くお歌しに傳ともい

一花紅比あも短冊と付しそそ人送て
徳屋し乃るり短冊と撰よ二よ初し
そそ残あ立あめて文ともあそ極しり
三よ初しそ花の下乃方し枝よむす

二一ノ形多し其修下ノ一也又を讀
て一ノ文多し乃上ノもどく居く一ノ居り
至て又短冊と爲て其多し一多し持く
の讀字とせん讀て其多し一多し讀を
一讀用と名短冊あると居く一多し一
さき一多し其多し一多し一多し一多し
く一多し一多し一多し一多し一多し
短冊ある一右乃一多し一多し一多し
下ノ一多し一多し一多し一多し一多し
讀をて一懐多の上り一多し一多し一多し
其多のうへ一多し一多し一多し一多し一多し

懐多も短冊も傳師の方へ明く
一け初も一多し一多し一多し一多し一多し
よの讀一多し一多し一多し一多し一多し
文冊ハ題と声の多し一多し一多し一多し一多し
多し一多し一多し一多し一多し一多し
一多し一多し一多し一多し一多し一多し
多しの句一多し一多し一多し一多し一多し
字にけ七文字一多し一多し一多し一多し一多し
字一多し一多し一多し一多し一多し一多し
修多讀て一多し一多し一多し一多し一多し

讀く

一天象ハ雲分地儀ハ地分動物ハ生類分
一靈禽内とあるんハ龍鵬鷹鷲時多死鳥鳩
學鶴計類ヲ讀く

一我意とありむ其ハ我士ノ方とある讀

一芳草とあるんハ何ノモカふ草ノ名也

一毒虫ハ蝶鳥雞子等ノ類也

一神誠情急ハ神志也後ハ依ノ讀

一水海新雪ハ只水也上ハ神雪也

一泉名ノ久位也

一院士出山ハ聖人賢人ホシ世ノ世ノ讀

一傀儡ノ江口ハ在不在ノ事也

一夜妻ノ事也

一程君トシテ必王照君妓女揚妃妃也

一相撲ノハウキ也

一競子ノハ賀茂ノ祭方也

一蹴躑ノハ敷也

一アノ事也

一双六ノハサイイ也

一夜猿ハサカノ山ノヒマ也

一荒洗トハ波ノ河也

一迅激トハ水ノ急也

あろとふむへら

一黄葉、くすねもみちなるん

一イソレ心とはそうくなむかたなるん

一鞍中ハト吹嵐よ何うに愁るさひし

群山雪わ
山に雪のほ
たふかこ但ひ
うたふ山のさ

一志情とハ心と残く芳し

一群山雪よは山よ雪の海なるこ

一外外とハ只聖座と一讀こ外ハ座

字こ何もけ類あへ

一秋ハシ散瀟ハシ溪ハシとハあのかくれよあるこを

後の瀟ハやりあるとるん

一西鞍旅ハハ行こま

一旅ハ伯ハありあるなるへ

一月多秋友よは月ハあき秋の友と

後し月よ秋の友あへハ

一友よは詠く宮居難波の文尾上

る友多那の文あくと漢あるヨ求一後

一半出月る友半におる月あへ

一友多秋旅人ハ交中ようさも悦も人が良

一旅泊ハ海邊ある遠舟こまり

一視ハ何ても歴然ハ

一七夜とハあふとにち七夜のあふり

八子度多し皆教へたるき方と云
一とへくかむらゝの葉よんくられて
の葉くさちあつたも
後頼心

けみくさみくられ之鵲の葉くさハ相
の手籠もあきさる也只をもあきさるあり
ちちハそしとんやりさる方也やちあつたも
ハ葉よんか也又うちあつたハ甚まへと君も
あくもの行るさるありま〜ハ柳
也け一さハさほくかあ能く味味
一とへくのちはまたてり人つまのあさて
屋くさむあハ何〜ぬ是ハ拾遺集

乃葉也〜六北懸〜
一花移本とハと紀ハ本のさ〜也後撰集
花の葉ハぬ〜
つと本ハ松のこ〜
一と〜ハ香白〜
さ〜様志法〜
香こ〜
一と〜紀年法〜
忠見

忠見
志ほ〜
い〜

けん八人の名の忠見とよき入らり多し見あへん
あはくあはくしてあはくあはくしてあはくあり

一歌一それ内とたあり一詞二阿るあした

とくを花立花の香神の香各別あれハ一

の内は續ありけ候別を秘密し又詞

なされとも心の同とあれを不三讀あり

一ありそくハあつて疾るあはるあり

一さよと云ふと輝あつて不三讀自然冬

ハあはくしてさハたも一ろきんほをたは也

一いあおほを鳥一説格一説世きれい一説多

かし云も也 物ニあつて

一ち縁さあ一はは 福栄のこと也

一うあ一さとはあも一ろきも也

あはくして縁さハそく物一それ

たもひもいれ一秋のよれ月

一さぬハ戸とあり本あり

たアハあはくしていよアハあはくして一た山

あはくしてそれとよさぬアハあはくして

一又たてこころさハあはくしてありてハ至字也

果あけ説を二秘之又の説生ハ

そくいとも也又貴業ともアハ也

一ひは一と目と一と云ハ又音あは通ひつて

親孝考
三三七
親孝考
三三七
親孝考
三三七

けん八人の名の忠見とまき入らり多見あへ
あへくあへまてあへあへくは親かあり
一歌一それ内とたあ一詞二何さあした
とくを花立花の香神の香各別あれハ一
の内は續ありけ依別と秘密し又詞
なそれとも公の同とあれを不三讀あり
一ありまへくハあへくはあへくあり
一さよと云あへ輝あへて不三讀自然冬
ハあへくくさハたあへるき公ほを記也
一いああほを鳥一説松一説せきれい一説多
よし云も也 松二何し

一あはさあへ一はは 秘覚のとも也

一うあへさとはあへろきとも也

俊成の

あへまへ詠進ばへろしれ一それ

たもひもいれ一秋のよれ月

一さぬハ戸とあり本あり

たアムあへろいよアムあへろ一た山

あへれともさぬアムあへくよ

一あはてこへさハああ記ありてハ至字也

一そへい葉あけ説を二秘こ又の説生以

そへいとも也又貴葉ともアも也

一ひは一と目と一と云ハ又音あ通いあつて

一也 万葉集の短歌に在之

一葉の^{子抄}返^り味て子葉の^{コト}鑑^を短とある

短より^始也

一あとかしーくさくさくこれとおほきき方

一玉壘此あこちれさうり吹風のさむくハ

そくくいきんもさ

一ありつれをたふさよけりーそかー世の

仏よ花をの たふさハ也

一きり立人ハなろる人ぞ云也又きり

くしえきぬと云あろもあり本家に

いまハとて秋をてうれー男あれとも

きり立人そあやハさし

一かべとハる友のしある藤もぬ也又も

ぬれハる也さんともうつともれく

ぬれもあてささうよる友のやうある

とのあさうとといひー本家よ

海とまなかりーよも人をえはらうか

あさうーあむ春の木の葉

福ぬ葉よむーのうへをえつらくれ

いづよ拍そくねーくりり歌

一かきうう紙花何もうつー記をさ也

一かきとハ海川又ほもひ又万れおなき

鳥子也

我門下子鳥志をれく起よ

我一良妻人母志をれく起よ

一少のたま毎子と也一それ千々いれちと去子ふりた万比あま在る

一八千ともれたといか海記傳の男なり

一聖つとも君のつさいあまのつさ何ともい

まも也

一万代のあまも極ぬ白糸綾うしろやあ

くもかろつる系

一水もせよう記ぬる時を志うこれうちのお

ともみぬもらちもけかせ何と而せをきと云也

一た地とはえんてきれとケ数守のかろ也

いぬちもたのまさあんがよちと

いぬの言もありと云なり

一停幣渡る川とは海川をいよ川流て流れ

本歌

停幣渡る川ハ袖よりかふる流也

とあよといせぬ身いさぬと

一あもかろりいさあ一方をさあ

一さやさめの年ハ丁年とあしひのとけ

いませんといひいそり子流うて
流よらぬへいさやさめのと

一さくさめとはあつとちのるす也

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

くさむしあま庭あつと云りかあ

かこくさく相あつと云りかあ

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

小付と云りもあつと云り

一山伏とは何もかろ〜と云りかあ

けいふふと云りかあ

かろ山あ〜と云りかあ

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

あまの庭あつと云りかあ

と云りかあ

一あまの庭とはあま庭あつと云りかあ

物の名也

一市一あ^りとハニのをあり一ハハ^りあり
又ハハ^りありと云々

大^きに^きれ^る田^を鶴^の市^一あり
お^もふ^ころ^いあ^けあり^りお
標^本とよ^いに^さあり

かくてちとせのま^まと^そえ^り

一ありわ^しとハ^りる^ん又ハ^り雲^のあ^い見
こ^えた^らも^云也^何も^依奇^神一^用造

標^も神^さひ^りり
一ありわ^しとハ^りる^ん又ハ^り雲^のあ^い見
こ^えた^らも^云也^何も^依奇^神一^用造

亞櫻集^に在^但歌^後あり

山嶺^を

ろ^ふあ^りわ^しとハ^りる^ん又ハ^り雲^のあ^い見
こ^えた^らも^云也^何も^依奇^神一^用造

一ぬると云^り分別^のこと^本あり

野^をす

定^ん家^ん

夏^あて^ぬや^川造^れ志^のあり
神^吹り^あ秋^のま^つの^勢

可^染す

秋^うに^ぬや^川造^れ志^のあり
人^も造^れす^君も^さり^さり

朝うすをぬるや川也の志のしり

おもひてふれをるふんこつ

ゆのの本字の潤し字をひるこ川也あれあ

ゆのゆもや ^や ぬるゆに ^い ありあ

もあはぬると ^い あれを ^て ぬく

ふぬるもや ^ゆ の ^ゆ

一ふくさと ^い ぬあり ^い ぬ ^い ぬ

し ^い ぬ ^い ぬ

一をぬる ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

一新古と集の序 ^い 住吉の神 ^い ぬ ^い ぬ

の ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

昔 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

志 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

か ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

志 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

一郭 ^い 公 ^い 序 ^い の ^い 志 ^い ぬ ^い ぬ

ゆ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

一 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

一 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

一 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

一 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

津国乃何 ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ ^い ぬ

こはよあひつらんるりまのこころ

一ふきのさかハさうひ也

一五月雨ハげじりハ比とさうさうさ

又月ぬハたくさ藤のさゆりかき絶て
志わぬれまさる次ノのうう人

右之聞書者去永正十七年之夏坊嘉
山口 清本取様此下向此岸畝中受此家
説話之早

又大永七流永流甫信規世ノ御お旅者陸
分迄全くと写之早

殊外由秘發し此を信用し以の勢と秘と急甫之
以上教二百三十ヶ条也

正保二曆 仲姪上之六日 令授合

早

予少年之時以或本書字平然古本經
之紙破而予喜故又新本端之紙白而經
年序今固全本書其端之白紙耳

右在冊速水先生以之書寫之者也

元文五庚甲午五月十四日

藤原親岑



先年此在冊寫之予誤字文書若後混雜在之
板本和壽秘傳書二卷卜同書也今校合之
發強之取少之書改又共全錄文章甚若後
在之借何レカ證本成事難知少之脫漏ハ
以本書補之者也

于乾室曆八廿宣年 初秋十八日

